2023-9-15

果てしなき絶景～マティスの旅と作品への反映～その２(コリウール)

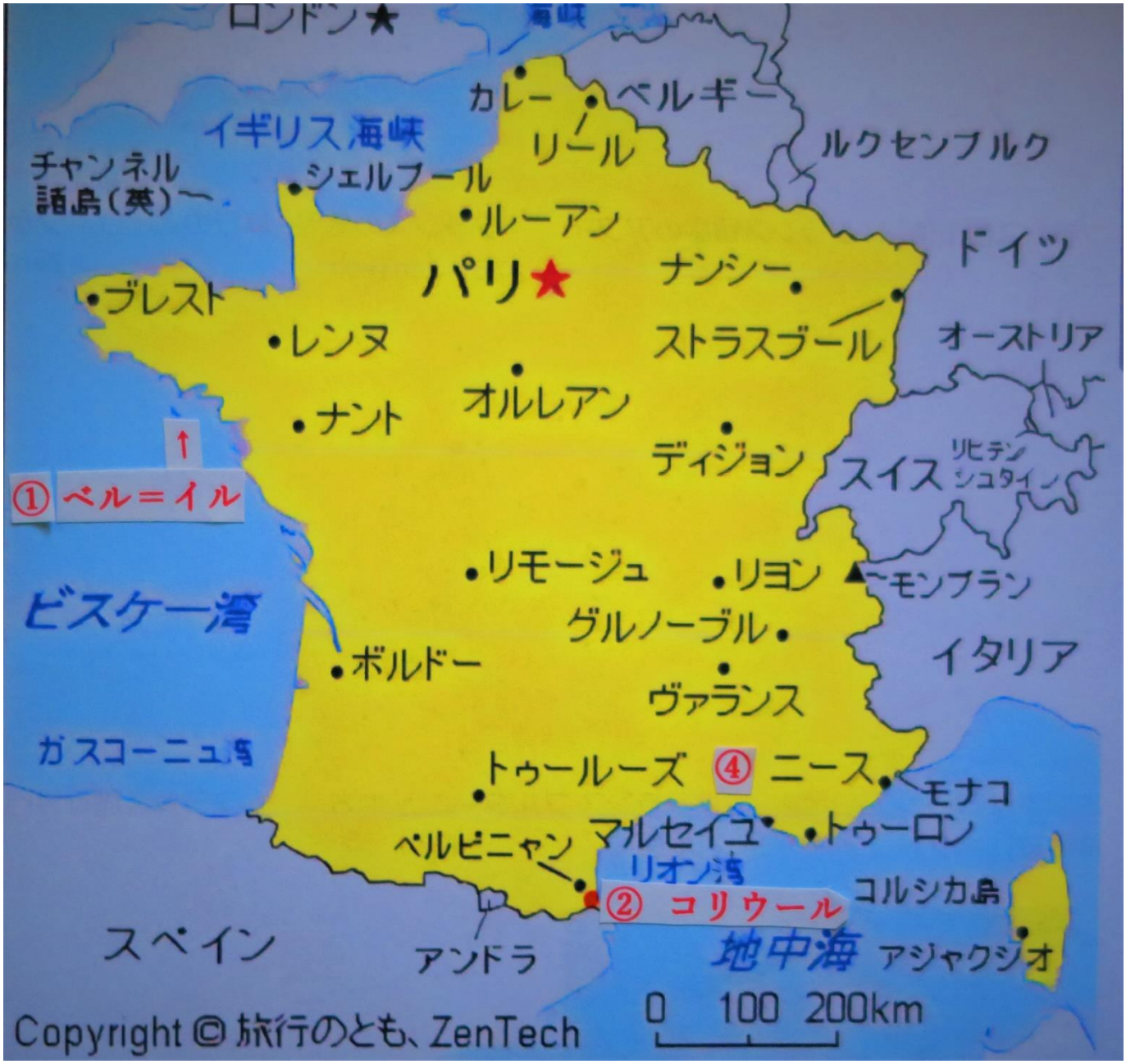
山本 雅晴

マティスは 1895～97 年夏のベル＝イルから 1905 年夏のコリウールへ行く前の約 10 年の間に幾多の困難を突破しなければならなかった。その一部は前回の表にも示した。1898 年の結婚・コルシカ島での修行、1899～1900 年 2 人の子供の誕生、1902～3 年の妻アメリーの両親の詐欺疑惑(アンベール事件)への対応と一家の経済的困窮、1904 年夏にサン＝トロペでシニャック、クロスと会い点描絵画の習得。前回記述したいろいろの絵画手法のアプローチ：印象派風、ゴッホ風筆触、セザンヌ風構図・量感表現→彫刻、など。

マティスの旅には絵画以外にいろいろな副次的な目的があったように思われる。趣味も多彩でバイオリン、車の運転、工芸品(布帛・敷物・陶磁器)蒐集など。これらは後の装飾絵画やオダリスクのモデルの衣装・装飾、室内画や静物絵の備品として何気なく添え描きされている。

下図はフランス国内の地図で、マティスの生誕地はリールの南のル・カトー＝カンブレジである。1890 年頃にパリに出て絵画の修行をした。

図１　フランスの主要都市およびマティスの旅行・居住地



コリウールとそこを拠点とした作品の展開

コリウールは地中海岸でスペインとの国境に近い小さな漁師町だった。画家でもシニャックだけが訪れたことがあるだけで、1905 年にマティスと妻アメリー、マルグリットとただ一軒しかない宿に滞在した。

図 2　コリウール：高台からの眺め

図 3　1905 年マティスが滞在したコリウールの宿

図 4　コリウールの海 1906 バーンズ美術館

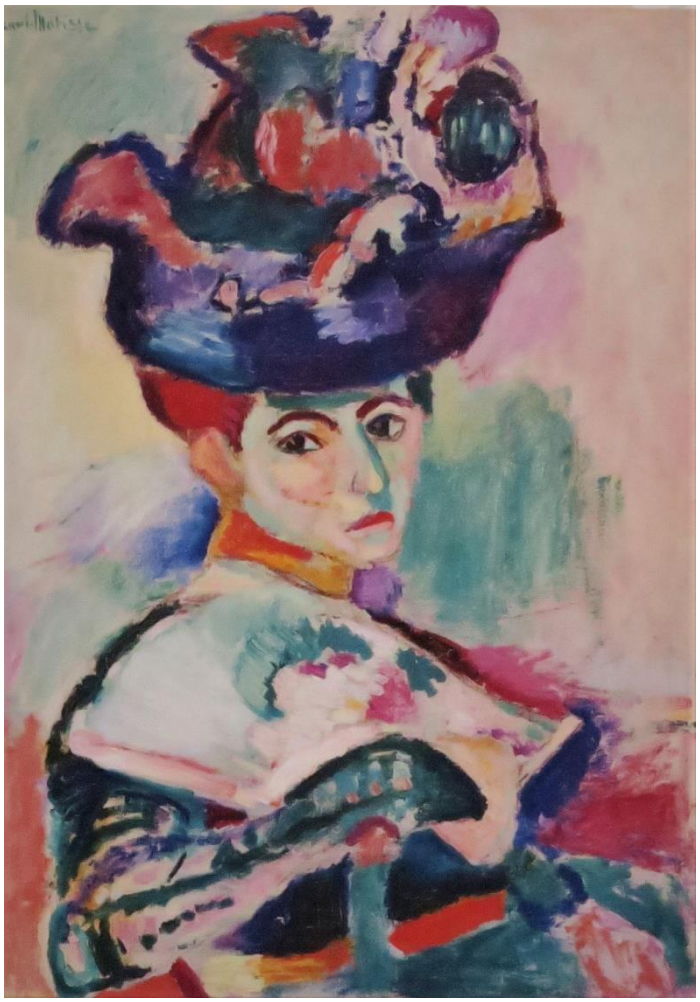


図 5　帽子の女 1905 サンフランシスコ近代美術館

図 5 は米国の実業家兄妹でパリに滞在していたスタイン家の長兄マイケルと妻サラが購入した。1906 年にサンフランシスコの自宅に持ち帰り自宅に展示していた。マティス作品を米国に持ち込んだ最初の作品といわれている。1905 年の展示会で“フォヴィズム”と呼ばれる発端作品！サラの死後コレクターに渡り、サンフランシスコ近代美術館に寄贈された。2018 年 3 月に現地で鑑賞できた。1913 年にニューヨーク、ボストンとシカゴで開かれた「国際現代美術展」で NY の兵器倉庫で開催されたためアーモリ・ショーと呼ばれた。1200 点に上るヨーロッパ、米国の作品が展示され多大の反響を呼んだ。セザンヌの「大水浴」「サント・ヴィクトワール山」、モネの「印象日の出」、マティスの「青いヌードービスクラの思い出」は最大の顰蹙を買ったが、米国でマティスの名は大いに知られるようになった。

1905 年のフォーヴに至る前の 1904 年夏のサン＝トロペでシニャック、クロスから吸収した新印象主義（点描画）をマティス風にアレンジした作品「豪奢・静寂・逸楽」はクロス風の楽園的主題とセザンヌの水浴図を重ね合わせ、マティスの転機となった。1905 年のサロンに出品され、シニャックが購入した。後年国に寄贈され国立近代美術館所有（ポンピドー・センター）でマティスのこの絵だけはオルセー美術館に展示されている。

図 6 豪奢・静寂・逸楽　1904　98.5 x 118　パリ、国立近代美術館

図 7　開いた窓 1905 ワシントンＮＧ

図 8　生きる喜び　1905～06　175 x 241　バーンズ美術館

図 7 の「開いた窓」はマティスがいろいろな場所で好んで描いている。図 8 はコリウールの風景をもとに裸体群像による架空の光景が、水浴図や楽園のイメージで描かれている。ピカソを触発し 20 世紀絵画の魁となった。1906 年のサロンに出品され、即座にマイケル兄妹に買い取られた。1921 年頃売却、1923 年バーンズが入手。